

## 「正義」の仮面に隠された怒りと羨望

精神科医  
片 田 珠 美

みなさん、こんにちは、片田です。よろしく願いたします。

私は精神科医として、二十五年以上、精神科医としていろんな患者さんを診てきております。途中、京大の大学院に行ったり、それからフランスに留学したりしておりますけれども、その間も様々なかたちで患者さんを診ておりました。ですので、先ほど門脇先生のほうから非常に格調の高いお話だったのですけれども、私はどちらかというと卑近な話、下世話な話で、「正義」の仮面に隠された怒りと羨望」についてお話させていただきたいと思います。

「正義」の仮面に隠された怒りと羨望」、これはやはり自分自身の内なるガイスト、精神であり、亡霊でもある内なる悪、ガイストとどう向き合うかという問題でもあります。ですので、先ほどの門脇先生の話とも非常につながってまいります。

そして、先ほど私感動したのですけれども、日本でアンティゴネーの話をきちんとしたかたちで聴けるとは思っています。アンティゴネーはギリシャの古典中の古典ですね。ハムレットもアンティゴネーも精神分析と非常に深い関係があります。私は精神分析を学ぶためにフランスに留学しておりましたけれども、精神分析というと真っ

先に思い浮かぶのはオイディプスコンプレックスですね。このオイディプス王はその悲劇の主人公でありますけれども、オイディプスの娘が先ほど門脇先生がお話くださったように、アンティゴネーです。私はフランスでラカン派の精神分析というのを学んでまいりましたけれども、ラカンはそのアンティゴネーを美の象徴として称讃しているのですね。『セミナール』の七巻でそのアンティゴネーの悲劇を取りあげていて、先ほどお話にもありましたけれども、掟との関係でその彼女が兄の埋葬にこだわった理由というのを延々と論じていくのです。ですので、私は非常に感動いたしました。

そしてそのソフォクレスはオイディプスの悲劇も描いていますし、アンティゴネーの悲劇も描いています。そしてフロイトは、古今の文学の三大傑作として三つを挙げています。ソフォクレスの『オイディプス』、シェークスピアの『ハムレット』、そしてドストエフスキの『カラマーゾフの兄弟』、いずれも父殺しをテーマにした作品というところで、この三つの作品を挙げています。素晴らしい作品です。

それで今日は「正義」の仮面に隠された怒りと羨望についてお話するにあたって、まずシェークスピアに敬意を表して、シェークスピアの悲劇の一つ『オセロー』からお話したいと思います。それで私ビッていまして、なんかシェークスピアの専門家の方がいらしているというのでちょっとビビりましたけれども、素人ですのでその辺はご容赦いただいて、あらすじなどをご紹介したうえで、またこの悲劇に描かれている「嫉妬」と「羨望」についてお話ししたいと思います。

『オセロー』というのはご存知の方もいらっしゃるかと思いますが、ベニスにオセローという将軍がいたわけなのです。この人はすごく勇敢な将軍でした。当時ベニスは都市国家として栄えていましたけれども、トルコとの間に地中海の覇権を争って何度も戦争をしていたのです。それでオセローは、トルコ軍を撃退して尊敬を集めていた

のです。ところがここでちょっと問題が起きてきます。オセローは副官としてキャシオーという人を任命するのですけれども、そのことに不満を持った部下がいたわけです。イアーゴーという部下です。イアーゴーは、自分こそが副官に任命されて当然というふうに思っていたわけです。ところが自分ではなくて、別の部下キャシオーを副官としてオセローが選ぶわけです。そこでイアーゴーは、許せないということで陰謀をめぐらします。どういう陰謀か。オセローの美しい妻、デズデモーナがキャシオーと不倫して密会しているというふうな話をオセローの耳に吹き込みます。告げ口をします。しかも不義密通というのがいかにも本当であるかのように見せかけるために、オセローがデズデモーナに贈ったハンカチーフを盗んでキャシオーの部屋に落としておくわけです。すごい陰謀ですね。まるでメロドラマに出てくるような陰謀ですけれども、それでイアーゴーの作り話をオセローは信じてしまうわけです。そこで嫉妬に狂ったオセローが妻のデズデモーナを絞め殺してしまうのです。ところが最後にすべてイアーゴーの企てた陰謀だと知って、絶望して自殺してしまうわけです。これが悲劇です。

この悲劇の中でイアーゴーが抱くのが「羨望」です。そしてオセローが抱くのが「嫉妬」です。みなさんの中には、「嫉妬」と「羨望」はどう違うのかというふうな疑問を抱かれる方もいらっしゃるのではないかなと思います。この「嫉妬」と「羨望」の違いを見事に描いているのがこの『オセロー』なのです。オセローは妻の愛を失いたくないという気持ちが強くて「嫉妬」を抱くわけです。イアーゴーは、そのオセローが民衆から得た名声であるとか尊敬、そういうものを「羨望」する。そしてキャシオーが自分を差し置いて得た副官の地位、その地位を「羨望」するわけです。

この「嫉妬」と「羨望」の違い、これを『オセロー』という悲劇は見事に描いているわけなのですけれども、これを端的にいつているのが、フランスの十七世紀のモラリスト、ラ・ロシュフコーという名門貴族です。

このラ・ロシュフコーというのは、王家に次ぐぐらいの名門の家に生まれるのですけれども、ちょうどルイ十三世からルイ十四世に移っていく時期で、いろいろな政変とか、陰謀の渦に巻き込まれていくわけです。しかも恋多きおっちゃんだったわけです。恋多き女というのはありますけれども、恋多きおっちゃん、どちらかというと貴婦人の色香に騙されて、「こう動いて」とかいわれると、いろいろなことにのめり込んでいくのだけれども、そのたびに騙されているいろいろな目に遭っているわけです。

どういふ目と目とに遭っているかというと、今日お配りしたプリントの右側の「精神科女医のつぶやき6」というところをご覧いただきたいのですが、「いい人」が突然キレる理由は」というところです。

この連載は私が産経新聞の夕刊に連載して、ちょうど木曜日に掲載されます。ちょうど木曜日に産経新聞のサイトでも全文アップされますので、今日ここに来た方はみなさんぜひインターネットで今日の分もご覧いただきたい、ちょうど『正義という名の狂気』という私の著書を紹介していますので、ぜひご覧いただきたいのですけれども。

そこでラ・ロシュフコーを去年の秋ぐらいに取りあげたのですけれども、その上から二番目の段の最初から二番目の段落をご覧ください。ルイ十四世の時代のフランスの名門貴族です。彼の吐いた毒のある警句、非常に辛辣で毒舌家で悪口ばかりいっているのですね。この人が女の悪口をいっぱいいっている。「大部分の女の才気は、理性よりも狂気を強めるのに役立つ」、「貞淑であることに飽き飽きしてない貞淑な女は稀である」、「女は最初の恋人を長い間確保しておく、二人目を作らない限り」という毒のある言葉ばかりが並んでいるのです。よっぽどひどい目に遭ってきたのだらうなというふうに思うのですけれども、どういう目に遭ってきたかという、次の段落をご覧ください。て、美貌の貴婦人に身を捧げんと騎士道精神に燃えて陰謀の渦に巻き込まれていくのです。いろいろな戦争に、

ちよつとおつちよこちよいのところがありますので、自分から突き進んでいくのですけれども、常にアバンチュールというのは愛人に裏切られる結末を迎えています。その政変とか陰謀というのも常に自分が負ける、負け犬になるような運命を迎えているわけなのです。しかも、バスチーユに投獄されたり、顔面に銃弾を受けて失明しかけるほどの重傷を負ったりとか、なかなか恋多きおっちゃんでありながらかわいそうなおっちゃんであるところもあるのです。ですが、この人がそれだけ女で苦労してきたからか、非常に洞察力があるのです。それでこの洞察力というのは、そのDNAはどうも受け継がれたらしくて、彼の何代目かあとの子孫が約一世紀ちよつとしてから、一七八九年のフランス革命のときにバスチーユの襲撃がありますよね、そのときにその報告に行くと、そうするとルイ十六世はお坊ちゃん育ちで呑気な人ですから、「暴動だろう。放つとけ」というわけです。そうすると報告に行つた貴族が、「いい陛下、暴動ではございません。これは革命でございます」とすごく危機であるということなのですけれども、その貴族というのがラ・ロシュフコーの何代目かあとの子孫なのです。ですから、ものごとの本質を見抜く洞察力のDNAというのは受け継がれたのかなというふうに思うのですけれども。

それでこのラ・ロシュフコーが「羨望」と「嫉妬」について次のようにいっています。左側の36のほうをご覧いただけますか。これは先週掲載されたものなのですけれども、一番上の段の最初から二番目の段落、羨望というのは、「他人の幸福が我慢できない怒り」。イアーゴは自分を差し置いて副官に任命されたキャシオーの幸福が我慢できなかったわけです。ですからこういう陰謀をめぐらせて、オセローとキャシオーを破滅させようとしたわけです。それに対して「嫉妬」というのは、どういうものか。その下の段です。その下の段の終わりから六行目ぐらいのところ、嫉妬というのは、「我々が所有している幸福、もしくは所有しているように思いこんでいる幸福を守ろうとする」ために生じるのです。「嫉妬」と「羨望」の違い、おわかりでしょうか。

オセローは、自分の妻を失ってしまったのではないかという恐れから、「嫉妬」を抱いたわけです。これは「嫉妬」なのですけれども、もうちょっと下世話な話をすれば、隣のおっちゃんが自分の妻に対してなれなく話しかけるのを見たら感じるのが「嫉妬」、すごく美人でスタイル抜群の女性を見て、後で紹介されたら実は同僚の奥様だと知ったときに感じるのが「羨望」というわけです。ですから「嫉妬」と「羨望」というのは、微妙に違うといえちゃうのですけれども、やはりみなさん、この二つの感情というのは、入り混じったかたちで感じるのではないでしょうか。

それが端的に出ているのが、その新聞のところに挙げている宮沢りえさんのお話です。ということがあったかというところ、宮沢りえさんが娘さんの入園式に一四〇万円、これシャネルスーツらしいですけれども、そのスーツを着て出席したところ、ほかのママたちから厳しい視線が向けられて、「空気を讀んでほしかった」という声があったということなのです。これこそ「羨望」ですね。他人の幸福が我慢できない怒りなのです。超高級品を身に着けて、颯爽と現れた美人女優の「他人の幸福」をほかのママたちは我慢できなかった。けれども「羨望」というのは、「陰にこもった、恥ずべき情念」。これもラ・ロシュフコーがいつていることなのですけれども、これもさすがですね。そういう誰にとっても隠したい感情なので、丸出しにするわけにはいかず、こういう声になって出てきたのだと考えられます。

ですから「羨望」というのは、「陰にこもった、恥ずべき情念」である、隠したい感情なので、そういう場合は必ず「これが正しいのだ」という「正義」をふりかざすのです。「入園式にそんな超高級品を着てくるものではない、浮かないことが何よりも正しいことなのだ、だから私は正しいことをふりかざして宮沢りえさんをたたっているのだ。決して宮沢りえさんの「他人の幸福」を妬んでいるわけではありません、羨んでいるわけではありません」

というふうなママたちの声が聞こえてきそうですけれども、往々にして「正義」をふりかざす場合というのは、自身の内なるネガティブな感情、「怒り」とか「羨望」、「嫉妬」という感情を直視できないから正しいことをふりかざして他人をたたくということがあるのです。

そしてこのママたちの心情というのをととみていくと、「羨望」だけではなく、「嫉妬」も入り混じっているのがわかりますね。おそらく私立のセレブ幼稚園ですから、それなりの方たちばかりです。美貌に自信があり、若いころからちやほやされてきて、旦那もそれなりにお金持ちで、お金もあるでしょう。そうすると「私こそが一番きれいよ、私のお洋服が一番素敵なはずよ」と思って、一張羅を着こんで入園式に出かけて行った。そうしたら、あの有名な美人女優が一四〇万円のシャネルスーツを着ているではありませんか。そうすると自分が所有していると思いつているような幸福を奪われたような気がして、「嫉妬」も抱くわけです。ですからこういう場合、「羨望」も抱くし、同時に「嫉妬」も抱く。「嫉妬」と「羨望」というのは、入り混じったかたちで私たちを苛むのです。

ただ重要なことは、「嫉妬」にせよ、「羨望」にせよ、女の専売特許ではないということです。「嫉妬」という字を思い出してください。左側に「女」「女」とつきますね。だからなんか「嫉妬」というと、女の専売特許みたいに思われていて、「もう女の嫉妬にはかなわん」といつているような男性もいらつしやるかと思えますけれども、必ずしもそうではないのです。男の「嫉妬」というのもあるのです。

そこに私の体験談を書いていますけれども、医学部の教授というのは、本当に申しあげるとほかの学部の教授よりもお金や権力が手に入ります。それでみんなだいたい入局して、すぐのころというのはみんな一人しかなれない、たとえば精神科だったら精神科で一人しかなれない教授を目指してみんな頑張っていくわけです。でもみんな脱落していって結局一人しかなれないのだけれども、そうするとこれくらいの歳になるとやつぱり同級生の教授就任パー

ティーというのが開かれるわけです。そこに出席すると、表では「おめでとう」といつているのです。ただ陰で何といつているかというと、「あいつは論文の数は多いかもしれないけれど、臨床はもう一つだ」とか、「今は昔みたいない「白い巨塔」とは違って、教授といつてもお金や権力が手に入る時代じゃないよね」というふうに、他人の幸福、教授になった同級生の幸福を妬んで、それを無価値化するようなことをみんないつているわけなのです。

そういうことはどこでもあります。私二週間ほど前に今回も販売していた「正義という名の凶器」という本が出ましたので、友人の女性の弁護士さんがあるレストランで内輪の講演会をしてくれたのです。そこはだいたい一流企業の管理職ぐらいの方ばかりがいらしていたのですけれども、そこから聞こえてきたのは、男の人が同期の人が役員になったら妬むとか、あるいはなんで自分が妬まれるのかわからないのいろいろな同期の人とか同僚から妬まれて嫌がらせをされたりとか、そういう話がいっぱいあったという話をいっぱい聞いたのです。

ですので、この「嫉妬」とか「羨望」というのは、男でも女でもみんな抱くものなのです。そういうネガティブな感情はあるのですが、やはりロシユフコフがいつているように「陰にこもった、恥ずべき感情」なので表に出したくないのです。そこでどういふことをするかというと、「正義」をふりかざして、自分が「羨望」を向けたい、「怒り」を向けたい相手をバッシングするようなことをどうしてもすることになるのです。ここに、人間の醜さであり、真実の姿があるのではないのかなというふうに思ふのです。

男の「嫉妬」というと、みなさんあまりなんかそういう本になつていふがあるのかなというふうにお思ひになるかもしれませんが、『男の嫉妬』という本があるのです。それは山本博文さんといつて、東大の史料編纂所教授をされている先生なのですけれども、副題が「武士道の論理と心理」といふ本で、ちくま新書から出ているので、みなさんお読みになったら現代のサラリーマンに通じるところがあるというふうにな、なんか共感なさる部分があるの



ではと思うのですけれども、その江戸時代の武士というのも実は己の昇進を願うのです。武士だって昇進を願うのだから、碌というのが増えていけませんから。それで昇進を願うのだけれども、他人に先を越される、ほかの武士が昇進していくと、もうそれを妬んでひがんで、陰で誹謗中傷したり、陰で足を引っ張るようなことをいっぱいしているわけです。その姿を生々しく描いているのが、この山本博文先生の『男の嫉妬』という本なのです。

山本博文先生は、この「羨望」とか「嫉妬」というのはどういうところから生まれるかということをおっしゃっています。「多くの場合、自分の中に「正義」があると考えることから生じていた。そこには納得できる「正義」もあるが、都合のよい「正義」もあり、中には全く自己中心的で独りよがりな「正義」もある。しかしそれはどれも本人にとっては、「正義」だった。本人が正しいと思っている限りは、「正義」なのです。

宮沢りえさんに厳しい視線を向けて、「空気を読んでほしかった」というふうに因縁をつけたママたちの中には、空気を読むこと、浮かないようにすることが正しいことだという「正義」があったわけなのです。その「正義」をふりかざすことによって、自分が宮沢りえさんを羨望しているわけではないというふうに自分の中の「羨望」を否認できるわけです。ですから自分の中に「正義」がある。ただこの宮沢りえさんの例をみればわかるように、都合の良い「正義」、自己中心的で独りよがりな「正義」というのは、実は後づけの理屈に過ぎない場合が非常に多いのです。もともと抱いていたのは、他人の幸福に対する「怒り」、「羨望」、「嫉妬」がないまぜになった感情なのですけれども、いずれも隠したい、恥ずべき情念なので、否認するために「正義」をふりかざすわけです。

人間というのは、自分の中に「正義」があるというふうに感じると、非常に攻撃的になります。自分が絶対正しいというふうにいると、「私が正しい、あなたが間違っているのだ」というふうに徹底的にたたかうようなことをするわけなのです。

最初に副学長先生からヘイトスピーチの例を出していただきましたけれども、あのヘイトスピーチというのが非常に良い例ですね。「自分たちは絶対正しい、あなたが間違っている」というふうに思い込んでいるから、確信しているからこそ、相手を徹底的に攻撃するわけなのです。普段であれば、口には出さないようなちよつときつい、非常にラディカルな言葉を使って相手を攻撃するわけです。ですから自分の中に「正義」があると思い込むことによって、場合によつたらそれが凶器になる、クレイジーにもなるし、それが凶器、武器にもなるというふうなことが実際にあるわけなのです。

これが非常に重要なことなのですけれども、「羨望」というのは、他人の幸福が我慢できない「怒り」だというふうに申しあげました。この「怒り」についてローマ時代の哲学者セネカは次のようにいっています。「怒りの憤慨は、己に対する過大評価から生じる」。

セネカというのはみなさんご存じですよ。非常に優秀な哲学者で、ネロの家庭教師を務めて、それから皇帝顧問筆頭にまでなつて、すごく出世するわけです。けれども最終的にはネロの命令で自殺せざるを得なくなる。それで妻と一緒に自分の血管を切つて自殺するわけなのですけれども、そのセネカが『怒りについて』という本の中でいっています。「怒りの憤慨というのは、己に対する過大評価から生じる」。自分は本当はもっとすごいはず、もっと高く評価されてしかるべきというふうに思い込んでいるのに、自分の価値をきちんと評価してもらっていないというふうに不満を募らせている。そうすると、高い評価を受けて尊敬されている人、またそのために富や名声を勝ち得ているような人に対して「怒り」を覚えるわけです。

この「怒り」、もっといえば他人の幸福に対する怒りである「羨望」というのは、己に対する過大評価に正比例して強くなります。つまり、いい換えれば、自己愛が強いほどこの他人の幸福が我慢できない「怒り」というのは強く

なるのです。これが現代社会に蔓延する病理ではないかなというふうに思います。己に対する過大評価、この自己愛の問題なのですから。

このことを考えていく上で、『男の嫉妬』という本を書かれた山本先生のご指摘というのが、非常に示唆に富んでいるというふうに思います。山本先生は、次のようにおっしゃっています。「江戸時代の社会では、『嫉妬』を緩和するシステムが機能していた。ところが現代社会では、その『羨望』や『嫉妬』を緩和するシステムというのが機能しなくなりつつあるのです」。なぜでしょうか。これは先ほど申しあげた自己愛の問題です。己に対する過大評価が強い人が増えているために、他人の幸福が我慢できない「怒り」、「羨望」が強くなっている。しかもその「羨望」とか「怒り」を抱えられない、直視できない。しかも隠したい感情なので、「正義」をふりかざして、「正義」の仮面に隠れて、他人をバッシングするようなことを繰り返すわけなのです。

では、なぜ「嫉妬」や「羨望」を緩和するシステムが機能しなくなっているのか。これは、三つの要因があります。

まず第一です。家庭の問題です。少子化で、少ない子どもを大事に大事に育てる時代です。教育投資もしています。ですから昔みたいにくさん子どもがいて、一人ぐらいできの悪い子どもがいても、「まあいいや」ですまされる時代ではないのです。一人か、二人か、多くて三人です。ですから子どもにものごく期待をするのです。フロイトは、「親の期待というのは、親の自己愛の再生にはかならない」といっています。特に自己愛が傷ついた親、自身自身が敗北感を抱えている親が自分自身の自己愛を我が子に投影して、期待という名のもとにどんどん走らせるわけです。その典型がステージママですね。自分が芸能人や歌手になりたかった、でもなれなかった。ですから自分の娘が生まれたら、何としても自分の果たせなかった夢を叶えるために赤ちゃんのときからオーディションを受けさせて

います。ステージママになる、そういうふうな人が多いわけです。そのほか勉強にしても、自分が入れなかった学校に入れるために、もう必死になっっている親というのはたくさんいます。そういうかたちで自分の傷ついた自己愛を子どもに投影して代理戦争を戦わせている、そういうふうな親が増えていくわけです。そうすると子どものほうは、親から投影された自己愛を背負ったまま走り続けるわけですから、思春期・青年期になっても過大な自己愛を背負ったまま、己に対する過大評価が強いまま、ずっと歳だけ取っていく、それで大人になりきれない、成熟拒否のような、そういう人が増えているのが現状なのです。

二番目です。学校の問題です。学校でこういう強い自己愛とか過大な自己評価というのを緩和するようなシステムが機能しているかという点、現状は全く逆です。学校というところは、今、幻想を吹き込む機関になっています。誰でも夢が叶うとか、やればできるといふような幻想を吹き込んでいます。私は、こういうことが全くだめとはいいません。でも何にでも表と裏がありますね。子どもたちを頑張らせるために、諦めさせないために、努力の大切さを教え込むために、「誰にでも可能性がある」、「やればできるんだよ」ということを教えるのはとても大切なことです。でも持つて生まれた能力とか容姿というものがあります。それから「努力できるのも才能」という言葉があります。ですので、やってもできない子もいれば、努力さえできない人たちもいるわけなのです。ですからこの現実を教えずに幻想ばかり教え込んでいくと、自己愛ばかりが膨らんで、どんどん風船が膨らんでいくわけです。ところがやっぱり多くの場合は、就職のときが多いと思うのですけれども、親は「いい学校に行けば、いい会社に入れば一生安泰だよ」みたいなちよつと昭和の神話みたいなものを教え込んできたけれども、現実にはそうではないことがわかるわけです。そうするとぶつかったときにどうしていいのかわからないので、就活鬱になる。それで落ち込んで、私たちのところへやってくるような人たちもたくさんいらっしゃるわけなのです。ですので、学校がどんどん幻想の風船を膨

らませ続けているというのも大きな問題だと思っています。

三つ目です。社会です。これは消費社会という面が一番大きいと思いますけれども、消費社会というのはものが売れなければまわっていないのです。消費者であるみなさまがものを買ってくださなければまわっていない、会社にお金が入らない、そうすれば従業員に対して給料も払えない。ですので、デフレ不況といわれて大きな問題になってきたわけです。そうすると、ものが売れないからこそ、コマーシャルというのがどんどん過激になるわけです。ですから「あきらめるな」、「Never give up」という宣伝をどんどん送り続けるわけです。「この商品を使えば、あきらめずにすみすよ」、「あなたも夢が叶いますよ」というふうな宣伝をこれでもかというくらい流すわけです。その最たるものが化粧品ですね。「この化粧品を使うと、シミとかシワが消えますよ」という宣伝に騙されて私もいろいろ化粧品を使いましたけれども、シミとかシワがなくなるわけではない。それでもそういうCMに騙されて使っていますけれども、そういう方はここにもたくさんいらっしゃるかなと思いますけれども。ですので、そういうふうな「あきらめるな」というキャッチコピーが垂れ流されている現状ではなかなかあきらめきれないのです。みんなが夢を見たがるのです。それが全くダメとはいわないけれども、やはりかつての日本にあった、江戸時代ぐらいまではあった「身の程を知る」とか「分を知る」という言葉が今死語になりつつある。そのためにすごく自己愛の風船が膨らんだまま大きくなっていく。己の過大評価を抱えたまま現実の自分を受け入れられない人が増えているのは、大きな問題ではないかなというふうに思います。

「あきらめる」というのは、みなさんなんとなくすごく負けたみたいにお思になるかもしれないけれども、「あきらめる」というのは「あきらかに見る」ということなのです。現実をあきらかに見る、それをするところから見えてくるものがあるのだよということなのです。それが今なかなかできないという人たちというのが、特に若い人たちの間

に増えているので、こうありたいという自己愛的イメージ、理想像ばかりが大きくなっていて、現実の自分とのギャップを埋められない。それでそれに直面すると鬱になるか、場合によったらそれに絶えられなくて薬物に走って依存症になっていく。場合によったら、自分はなりたくてもなれなかったもの、自分の自己愛的イメージをやすやすと実現しているような人、たとえば芸能人であるとかプロのスポーツ選手であるとか、エリートといわれるような人、そういう人たちがちよつとなんか失敗したりとか間違いを犯したりすると、徹底的にたたくわけです。これがたとえば芸能人の二股騒動とか生活保護受給問題というのが昨年ありましたけれども、そういうふうな問題があることも徹底的にたたく、しかもインターネットだと匿名ですので徹底的にたたくというふうなことをやるわけです。しかもその場合、「正義」をふりかざすわけです。あなたのやっていることは間違っている、私は正しいのだというふうに「正義」をふりかざして相手をたたくことによって、自分自身の「羨望」、「嫉妬」、「怒り」というふうなネガティブな感情に目を向けないようにしているわけなのです。ですので、やはり今のこの「正義」をふりかざして他人をたたく、この根底には膨らみに膨らんだ自己愛の問題、己に対する過大評価というのが根っこにあることを忘れてはならないのです。

では、こういう現状とどういうふうに向き合っていけばいいのかということ。現状を見ていますと、「正義」をふりかざして相手をたたく、相手にちよつとでも悪や不正があると徹底的にたたく、私はこれを「正義依存」といっていますけれども、この「正義依存」というのはどんなエスカレートする一方です。特にインターネットの登場によって、自分は匿名のまま、名前を明かさずに相手を徹底的にたたくわけです。ですから、インターネットの掲示板とかブログで炎上といわれるようなもうすぐく攻撃的な書き込みがどんどん増えていく。それからネット右翼といわれるような先ほどお話になったヘイトスピーチみたいなのもインターネットで書き連ねる。場合によったら街頭

に出てデモをするような、そういう人たちもどんどん増えているような現状があるわけです。

こういうふうな現状を前にして、どういうふうに我々は向き合っていけばいいのかということです。三つあります。

まず第一です。「怒り」、「羨望」、「嫉妬」、見たくない感情です。「陰にこもった、恥ずべき情念」です。でもこういうネガティブな感情が自分の中にあるということから目を逸らしてはいけません。喜怒哀楽、「喜び」とか「楽しみ」とかいうのは嬉しい感情です。「怒り」とか「哀しみ」とかいうのは嫌な感情です。でもそういう厄介なネガティブな感情も含めて自分の感情なのだということと向き合っていたきたいのです。これができないとどうということになるかというと、そのネガティブな感情を否認して投影して相手を徹底的にたたくということになりやすいのです。

これがどういうふうなかたちで出ているかというと、これも『正義という名の凶器』に書いているのですけれども、ある男性の患者さんがきて、妻が男とメールしていたと。それを見て自分はすごい嫉妬に駆られてもうすぐ妻を責めてしまうと。それでその奥さんも一緒に、どうしたらいいかと来られたのです。「それは仕方ないんじゃない」といって、ちょっとカウンセリングして、お薬も出さずに帰して、ちょっと心理テストだけ受けていただいたのですが、その後とんでもないことがわかりました。診療室のスタッフが目撃したのですけれども、その男性が奥様ではない若い女性と手をつないで歩いているところがあるスタッフが見かけたのです。ですから自分の中にやましいところがある人ほど他人を攻撃するのです。自分の中に浮気願望がある人ほど、他人が浮気しているのではないかと、いうふう非常に責めるわけです。これはもう一般的に認められます。

あるいは嘘つきというのは、ほかの嘘つきというのを非常に激しく責めます。私はジムに通っているのですけれど

も、そこで出会った女の人が医者といっていたのです。それが嘘八百だったとわかったのですけれども、その彼女を見ていて特徴的だったのは、ほかの人の些細な嘘を徹底的に責めるのです。「あの人は結婚しているといっているけれども、実は愛人でシングルマザーだ」とか、「あの子はOLといっているけれども、本当は大学を出てから一度も就職したことがなくて、プー太郎なのに夕方だけきて勤めているふりをしている」とか、ほかの人の嘘を徹底的に責めるのです。虚言癖のある人というのは、ほかの人の虚言を見出すと徹底的に責める傾向があります。

それからヒトラーも実はユダヤ人の血が流れているのではないかといいふうにいわれています。系図を見ていると、どうも祖父の代で不鮮明になっていて、ヒトラーのお父さんは私生児として生まれているのです。だからおじいちゃんが誰かわからない。しかもヒトラーのおばあちゃんが当時ユダヤ人の家庭に雇われていたというようなことがあって、実はユダヤ人の血が流れているのではないかといふうにいわれているわけです。だから彼はいわゆる典型的なアーリア人の容貌ではないですね。金髪碧眼ではない。髪も黒いですし、ちょっと違いますよね。事実というのは数の中なのけれども、彼自身が自分の中にユダヤ人の血が流れているのではないかという疑惑を払拭できなかったからこそ、それを否認して投影して、その防衛としてユダヤ人をあそこまで徹底的に弾圧したのではないかといふうにいわれています。

ですから人間というのは、やましいところがあるといふうに感じれば感じるほど、他人に対して同じ悪を見出すと、自分の中にその悪がないかのようなふりをするために、徹底的に攻撃するのだということを忘れないでいただきたいのです。ですので、非常にづらいことですが、自分自身の中にも「怒り」とか「嫉妬」とか「羨望」という「陰にこもった、恥ずべき感情」があるということ、自分自身の中の内なるガイストと向き合うことが大切なのではないかなというふうに思います。



二番目です。では「向き合ってもつらいだけだよ」と、「向き合っても、私そんなの耐えられない」と。もちろん耐えられないからこそ別のかたちで、たとえば「正義」をふりかざしてほかの人をたたいたりとか、そういうことをするのですけれども、でもだったら小出しにするしかないのです。私をご提案したいのは、「怒らない」「いい人」にならないでください」ということなのです。みなさんは、たぶんここにいらしているのは、みなさんたぶんとてもいい方だと思うのです。「怒り」を出すなんてとんでもないことだ、だからできるだけ「怒り」を出さないようにして我慢しよう、つらいけど我慢しようという方が多いのではないのかと思うのです。でも「怒り」を我慢して抑え込んでばかりいると、とんでもないことになってくるのです。三つの副作用が出てきます。

どういう副作用が出てくるのか、今日お配りしたプリントの右側の6のほうです。「いい人」が突然キレる理由は」というほうをご覧くださいいただけますか。その一番上の段の最初から二番目の段落です。「怒らない」「いい人」でいようとして、怒りを押し殺してばかりいる」と、これみなさん大部分そうではないのかと思うのですけれども、そうすると「怒り恐怖症」というのになってしまいます。

それで「怒り恐怖症」になってしまうと、どういう害が出てくるか。一、鬱や心身症の病気になることがあります。これ割と多いですよ。たとえば奥様が鬱になって、家事ができなくなつて病院に来られる。伺つてみると、なかなか主人が浮気している、その写真を見つけた。けれども主人はぜんぜん認めないし、悪びれた様子もなくて、堂々とその女性と旅行に行つたりしている。許せない、でもそれを主人にいつてしまうと離婚になってしまうかもしれない。離婚になると自分は専業主婦だから経済的に苦しい状況になる。それはちょっとやっていく自信もない。子どもにもみじめな思いをさせるので、とても自分はそんな決断はできない。だからといって「怒り」を押し殺しているうちに鬱になつてしまつて、家事もする気もなくなつた。夜も眠れなくなつたという方がいらつしやいます。だから

「怒り」を押し殺していると、病気になるのです。心身症というのが結構多くて、胃が痛くなったりとか、あるいは気管支ぜんそくの発作が起こったりとか、結構あるのです。この、病気になるというのが一つです。

それから二番目、怒りを偽装してこそこそと出すしかなく、つい「イケズ」をしてしまう。こういうのを「Passive Aggression (受動的攻撃)」といいます。どちらかというと消極的といったほうがいいかと思うのですけれども、積極的に相手を攻撃するのではなくて、非常に消極的なたちで攻撃する。たとえば同僚が自分より昇進して自分の上司になったとする。そうするとすごく「怒り」があるわけです。他人の幸福が我慢できない「怒り」、「羨望」があるわけです。自分のほうがその地位を得てしかるべきだと思っていたのに、その自分が所有していると思っていた幸福を同僚に奪われてしまったことによる「怒り」、「嫉妬」もあるわけです。でもそれをうまく出せないのです、その元同僚で今は上司が命令する仕事はぐずぐずしてなかなかやらないとか、ちょっと何か足を引っ張るようなことをするか、そういうふうな「イケズ」という、京都で「イケズ」というとなんかみなさん馴染みがあるのではないかと思えますけれども、「イケズ」というのはすごくいい言葉ですよね。意地悪とかいうより、なんとなく Passive Aggression の感じが伝わってきてすごくいい言葉だと思うのですが、その「イケズ」ということになってしまふことがあります。

それから三番目が、溜まりに溜まった怒りが突然爆発して、キレてしまうことだってあるのです。もう今までは我慢して我慢して夫に対して何もいえなかった。でもあるとき突然爆発して、「あんた、浮気してるのをわかっているのよ!」というふうに怒鳴ってしまうかもしれないのです。

こういう三つの害があるわけです。病気になる、受動的攻撃で「イケズ」をする、それからキレてしまう。そういうふうになるのを防ぐためにこそ「怒り」を小出しにしていたきたいのです。誰にも「怒り」というのはあるのだ

す。だからそれを溜め込むのではなくて、少しずつ相手にどうやって伝えていったらいいかというのを工夫して小出しにしていくことが、実はキレずにいるために一番必要なことなのではないかなというふうに思うのです。

それについては、ラ・ロシュフコーというのがまた名言を吐いているのです。次の段をご覧くださいだけです。「怒らない」「寛大さ」、いい人というのは実は、自分は怒るような心の狭い人間ではないと、「いいところを見せたかったり、罰を下すのが面倒くさかったり、後で復讐されるのが怖いことから示すもの」。さすがですね。ですから「怒り恐怖症」というのは、虚栄心、怠惰、恐怖の産物にはかならないのです。

みなさん、思いあたりませんか。怒らないいい人になろうとしていた。でもそれは実は虚栄心であり、怠惰であり、恐怖の産物にはかならないのだと。ですから難しいかもしれないけれども、キレないためにこそ「怒り」を小出しにして言葉で少しずつ伝えていく努力、「怒り」を表現する練習をしていかないと出せないので、一定量お腹の中に溜まるとどうしても吐き出さざるを得なくなる。だから溜め込んでいるうちにキレるのです。ですからいつに「一日二怒」<sup>いちにちふたど</sup>。みなさんも「一日一怒」を目指して、「怒り」とか「羨望」というふうなネガティブな感情をできるだけ溜めないようにしていただきたい。これが二つ目の処方箋です。

最後の処方箋、これはやはりいじめということが今問題になっている。そして「正義依存」という正義をふりかざして相手をたたく行為というのにもいじめの要因があります。いじめというのは実は、あの子はちょっとぶりっ子だからとか、あの子はなんか先生に媚びているとかというふうな相手の悪をでっちあげていうか、そういうふうに作りあげて、それでたたくようなところもあるのです。

いじめというのは実は、加害者と被害者、この二者だけによって起こるのではないのです。必ずそこには観衆、

「もつとやれー」というふうにあおりたてている観衆、そして見て見ぬふりをする傍観者がいるのです。ですからインターネットによるいじめというのが今エスカレートしているというふうに申しあげましたけれども、ああいうのがエスカレートする背景には、やはり見て見ぬふりをする傍観者とか、あるいは「もつとやれー」とあおりたてるような観衆の存在があるのです。

こういう傍観者とか観衆の存在というのは、私は正義依存の「イネイブラー」というふうにこの『正義という名の狂気』の中で名づけたのですけれども、イネイブラーというのは「支え手」というふうに訳されています。どういうことか。たとえばアルコール依存症の患者さんの周囲には必ずイネイブラーがいることが多いのです。アルコール依存症のおっちゃんがいる。朝からお酒を飲まないともう手が震えて何もできない。仕事なんかとんでもないけど行けない。それで朝から酒飲んでグダグダくだをまいている。ではこの人がなぜ飲み続けられるのか。一人のアルコール依存症の患者さんの周囲には必ずイネイブラー、「支え手」がいることが多いといわれています。その人の酒代を出してあげるお母さんとか奥さんとか、場合によつたら恋人とか、あるいはお姉さんとか、だいたい女性が多いのですが、そういう人がいるのです。それと同じように正義をふりかざしてたたく「正義依存」の周囲には必ずイネイブラーがいるのです。傍観者であったり、観衆であったり、見て見ぬふりをする。そういうイネイブラーの存在が多ければ多いほど、いじめ、ほかの人をたたくという行為はエスカレートしていくのです。

ですからみなさん、自分が直接加害者になっていなくても、傍観者なり観衆なりになっていないか、ちょっと問いかけてみてください。「正義依存」のイネイブラーにならないためにも、自分自身に問いかけてみてください。そして自分自身の内なるガイスト、「怒り」、「羨望」、「嫉妬」という内なる悪と向き合ってみてください。そしてそれを言葉に出す努力をしてみてください。それはほかの人に伝えるということではなしに、書くことでもいいと思うので

す。書くことによって、たとえば日記でもいい、それから最近であればネット上のブログでもいい、言葉にして出すことによって自分自身の気持ちと向き合うこともできるのです。ですから自分自身の中の内なるガイスト、内なる悪と向き合い、そしてできるだけ「正義依存」にならない。それがやはりモラルということではないでしょうか。今このようにみんなが攻撃的になっていく時代ではありますけれども、最初に副学長先生のおっしゃった、決断におけるモラルということ、そこに自分自身の中の内なるガイスト、内なる悪と向き合う、それがまずはじめに必要なのではないのかなと思います。

はい、終わります。ありがとうございました。